

公開シンポジウム 『家族における父親』

日時：2001年12月3日

於：京都文教大学

1. 父という余分なもの

山極 寿一¹⁾

人類進化のシナリオ

私が人間社会における父親という存在に特別な興味を覚えたのは、家族という社会単位が人間以外の霊長類に見られず、それは人間のような父親が霊長類に存在しないことと同根の問題だと思いついたからである。そこで私は「父という余分なもの」という本を書いた。その真意は人間にとって父が余分な存在というわけではない。ほとんどの霊長類は父親無しで育つ。人間は父親を社会的な存在として組み入れることによって、霊長類には見られない不思議な社会性を獲得したということを書いたかったのである。社会学的父親の創造は人間にとって最も古い文化である、家族という強靱な社会単位をもたらしたというわけである。

私がそう考えた理由は、古い時代に生態学的要請によって変化した人間の形態・生理学的特徴が、まだ言語も生まれていない時代に家族の成立を促したと想定するからである。その根拠は近年の先史人類学、生化学、霊長類学によって、初期人類の進化を促進したと考えられる特徴が根本的な見直しを迫られたことによる。19世紀から20世紀の中頃まで、人類は初期の時代から高い知能を持って進化したと考えられていた。道具、武器、言葉などはその時代のキーワードである。しかし、世界各地で初期人類の化石が発掘されて人類が200万年前まで類人猿並みの小さな脳で暮らしていたことや、チンパンジーとの共通祖先とたかだか500~700万年前に分岐したことがわかると、人類は高い知能ではなく、直立二足歩行という奇妙な歩行様式によって進化したと考えざるをえなくなった。

なぜ、人類は二足で立って歩き始めたのか。

過去にいくつもの仮説が出たが、現在最も有力視されているのは、二足歩行が四足歩行に比べてエネルギー効率がいいという説である。たしかに、二足歩行は時速5km以内で歩く時はエネルギー・コストが小さく、長い距離を歩けば歩くほど節約できるエネルギー量が増す。すなわち、初期の人類はゆっくりとした速度で長距離を歩くのが適応的となる環境で進化したと考えられるのである。事実、最初的人类が誕生した500万年前は南極の氷冠が初めて現れた時代で、地球規模の寒冷化が到来したと考えられている。熱帯雨林は縮小して草原が広がり、それまで熱帯雨林の果実に頼っていた人類の祖先は、断片化した小さな森林をいくつも渡り歩いて暮らさねばならなくなったと思われる。長距離をゆっくり歩く能力が有利になるのはこんな環境だったに違いない。

しかし、老若男女だれもが長距離を歩けたわけではない。草原には危険な大型の肉食獣がたくさんいる。人間より大きな体をしたゴリラでさえ草原には進出できなかったのだから、人間にとっても草原を歩くのは難題だったはずだ。おそらく、初期の人類は分業をして食物を安全な場所へ持ち帰り、みんなで分けて食べたのだろうと思われる。つまり、男たちが遠くへ出かけて果実や肉など高栄養の食物を探し、老人や子ども、身重の女たちはキャンプの維持を計るという経済的な分業が起こったのではないかというわけである。初期の人類はいずれも男が女より格段に大きな体格をしている。男が外敵の防衛と体力を要する生活をしてきた証拠である。

1960年代から、人類の進化を促進したと考えられる特徴は、食物の獲得に関わるものに限定さ

1) 京都大学大学院理学研究科教授

れるようになった。最初は男による狩猟仮説、70年代には女による採集仮説が登場し、現在は食物共有仮説が唱えられている。すなわち、男女が別々の生業活動によって協力し、食物を分け合うことこそが人類に独特な社会性を育てた源泉だったというわけである。この考えに行き着いたのは、霊長類の野外研究によって食物の分配が霊長類では極めて珍しいことがわかったからである。霊長類にとって採食とは個体本位な行動である。類人猿になって初めて採食場所や食物を仲間に譲るという行動が出てくる。しかし、類人猿でも食物をねだるといふ行動がなければ、譲るといふ行動も発現しない。人間は相手に乞われなくても自ら食物を分け与える。食物を採集するといふ行為でも、すでに仲間に分けるということが前提となっているのである。霊長類の視点から見ると、人間はとても不思議なことをやっているということになる。おそらく、初期の時代に人類は食物の分配を積極的に進め、食物を社会交渉の道具にして霊長類としてはユニークな社会性を獲得していったのだろうと思われる。類人猿で最もよく食物を分配するのは雄であることから見て、初期人類でも食物の分配は男により、特定の仲間に対して行われただろう。それが父親であり、その分配の単位が家族になったに違いない。

霊長類の父親像

では、父親とはいったいどういうものなのか。人間以外の霊長類でも母親顔負けの子育て上手な雄がいる種がある。南米に生息するタマリン、マーモセット、ティティなど小型のサルでは、雄が生まれ落ちたばかりの赤ん坊を抱き上げ、四六時中抱いて世話をする。極端な場合は、母親が授乳以外は子育てを雄に任せきりということもある。これらの種では双子や三つ子がふつうで、しかも母親の体重に比べて重い赤ん坊を産む傾向がある。母親一人ではこれらの赤ん坊を育てることができないので、特定の雄が手助けをするように進化したと考えられている。すなわち、雄の子育ては多産や成長した子どもを産む傾向と強く結びついているわけ

だ。赤ん坊が離乳すれば雄の子育ては止んでしまう。

モロッコの森にすむバーバリマカクや、アフリカのサバンナにすむアヌビスヒビでも雄が熱心に乳児や幼児の面倒を見る。しかし、これは雄が自分の身を守るために子どもを利用してゐるらしい。子どもの世話をするのは優劣順位の低い若い雄であることが多く、子どもを抱くことによってその母親からの支持を取り付けられるし、他の優位な雄からの攻撃を受けずにすむ。攻撃すれば、雄ではなく子どもを攻撃したと見なされ、周囲の反発を買うので他の雄が遠慮するからである。この場合も、雄の子育ては子どもが成長して周囲からの関心を失うと途絶えてしまう。

人間の父親の子育ては、タマリンともヒビとも違う特徴をもっている。まず、人間では双子や三つ子は希だし、新生児の体重も軽い。また、自分の防衛のために男が赤ん坊を利用するという風潮もない。むしろ、人間の男はどの文化でも新生児にはあまり強い興味を向けず、接触する頻度も低い。近代工業社会では男が赤ん坊に接する時間は一日に15分程度という報告があるし、余暇の多い狩猟採集社会でも二時間を超えない。つきあい方も子育てと言うよりは遊びに近い、というのが一般的だ。しかし、特定の男と子どものつきあいは、子どもが思春期を過ぎても続くという点に特徴がある。どの社会でも、子どもは特定の男に帰属させられ、子どもの教育や身の振り方にその男が強い影響力を持つのである。こういうタイプの雄をもつのは人間の他にはゴリラとテナガザルしかいない。

テナガザルは、人間の核家族のような一対の雌雄とその子どもからなるペアの集団をつくる。雄はあまり子育てに関心を示さず、離乳期を過ぎた子どもとよく遊ぶ程度である。思春期になって子どもが独立し、なわばりを構える時期になると、父親も母親も子どものなわばりづくりを手伝うことがある。しかし、一般に子どもは親元を離れれば親との関係を断ってしまうので、親の影響力は思春期までである。

ゴリラも人間と同じように小さな赤ん坊を産

み、雄は乳児にあまり興味を示さない。離乳する頃になると、母親は赤ん坊をそっと雄のもとに連れて行き、よく置き去りにして採食に出かけてしまう。子どもは最初は雄をこわがるが、やがて雄のまわりにいる年上の子どもたちと遊ぶようになって雄のそばにいつくようになる。雄は子どもたちの喧嘩を仲裁し、外敵から守り、自分のそばで優先的に採食することを許す。こうして、子どもやだんだん母親からこの雄に依存の対象を移していく。ゴリラの雄と子どもたちとの付き合いもほとんどが遊びであり、雄は積極的に子育てをするわけではない。

ゴリラと人間の父親の共通点は、雌と子どもの双方から選ばれてはじめて子どもと密接に関わるようになるということである。雌が自分と子どもの保護者として特定の雄を選び、長期にわたって雄と親密な関係を維持する。母親によって雄に紹介された子どもが、この雄を積極的に頼ることによって、初めて雄は積極的に子どもと関わるようになるからである。つまり、ゴリラの父親も、雄が生後に学習する文化的な構築物なのである。

継承性がないテナガザルと違って、ゴリラでは条件によって親との関係が思春期以後も持続することがある。ゴリラは雄も雌も成長すると親元を離れる傾向があるが、父親が年を取ると息子が残って集団を継承するようになるし、雌も他の集団に移籍せずに生まれ育った集団に残って子どもを産むことがあるからだ。ここに、人間の家族に通じる重要な特徴が潜んでいる。それは、インセストの禁止という現象である。

インセスト・タブーと家族

インセスト・タブーは、古くから人間家族の成立に不可欠な規範と見なされてきた。動物社会の比較から人間家族の成立過程を構想した今西錦司も、この規範を家族が成立するための四条件（外婚制、インセスト・タブー、男女の経済的分業、近隣関係）の一つと見なしている。しかし、今西はインセストがすでに人間以外の霊長類においてもめったに起こらない現象であ

ることを知っていた。動物園のサルや餌づけされ個体識別された野猿公園のニホンザルで、少なくとも母親と思春期に至った息子との間で性交渉が回避されていることが報告されていたからである。その後、人間以外の霊長類の社会構造を広範に比較し、その社会進化を論じた伊谷純一郎はインセストの回避が霊長類の社会構造を決める重要な要因となっていることを示唆している。ただ、伊谷は近親間における性交渉の回避傾向が個体の出入りを左右するとは見なしていない。この二つの現象は霊長類ではそれぞれメイト・アウト、交尾回避と呼ばれ、異なる動機に基づいていると考えられているからである。メイト・アウトは思春期に達した雄やメスが自分の生まれ育った集団を離脱したり、加入した集団を再び離脱することを指す。近親者間の交尾回避がメイト・アウトを促進しているという例は少なく、むしろメイト・アウトが結果的に近親間で交尾を避けることに貢献していると考えられる。

ところが、人間の社会ではこの二つの現象が楯の表裏のような関係にある。インセスト・タブーによって姉妹との婚姻を禁じられる兄が与え手となって、外部の受け手（夫）との間に女の交換が成立することが外婚制であると見なせるからである。外婚制は霊長類のメイト・アウトに、インセスト・タブーは近親間の交尾回避に由来する現象だと考えられる。では、なぜ人間の社会では交尾回避がメイト・アウトを結果するようになったのだろうか。

雄の移動の主な原因は、成長するにつれて集団内の他の雄との間で交尾相手の雌をめぐる競争が高まったり、集団外により多くの繁殖相手を求めようとすると考えられている。ペア以上の大きな集団をつくる霊長類はふつう雄の方が雌よりも体格が大きいので、雌同士が交尾相手をめぐって激しく争うことは少ない。また、雌の発情期間は限られており、妊娠中や育児中の雌は発情しないことが多い。このため、いつでも交尾可能な雄と比べて、交尾可能な雌の数はいつも不足気味で、雄間に交尾相手をめぐる競争が起きやすいとも考えられる。多くの

種では、雌が集団を離れるのは繁殖相手を集団外に求めるためと考えられている。まれに雄から交尾を拒否されたり、子殺しが起きた集団を去るという場合もあるが、雌はむしろ自発的に繁殖相手を求めて集団をわたり歩くようだ。保護能力の高い雄を選んだり、見知らぬ雄に惹かれるという傾向も指摘されている。

母系社会でも父系社会でも、移動する雄や雌は生涯に二度以上移籍すると考えられている。最初は生まれ育った集団からの離脱で、父母、兄弟姉妹といった近親者との離別を意味する。二度目以降はその後加入した集団からの離脱で、交尾相手や自分の子どもたちとの離別である。雌雄の違いは、最初に離脱した後に顕著に現れる。まず、集団生活をする霊長類種では雌は単独で暮らすことはない。そのため、雌は離脱後すぐに別の集団へ移籍する。一方、雄は単独でしばらく暮らすか、同性の仲間だけで集団をつくるなど、雌より選択の幅が広い。また、雌は出産すると移籍しなくなる傾向がある。子育てをする雌にとって顔見知りの仲間と暮らす方が安全であるためと、授乳中は発情が抑制されているためであろうと思われる。集団間を移籍する雌の大半は、乳児をもたない発情可能な状態であり、雌の移籍の目的は繁殖相手を得ることであることがわかる。これに対して、母系社会の雄はあまり一つの集団に長く滞在せず、何度も移籍を繰り返す傾向がある。母系社会と父系社会を比較すると、雌の移籍が出産後に停止する父系社会の方が成熟した近親の雌雄が共存する可能性が高く、インセストの起こる機会が多いと考えられる。

近親者の交尾回避はどのようにして起こるか

両生類、鳥類、齧歯類では、形、声、臭いを手がかりに生まれながらにして近親者を識別できることが知られている。ところが、霊長類では生まれつき近親者を識別する能力が欠落していることがわかってきた。どうやら、霊長類では生まれ落ちてからの社会的経験が交尾回避を引き起こしていると思われるのである。

実は、このことは人間の社会でいち早く指摘

されていた現象だった。1891年に『人類婚姻史』を著したウェスターマークは、一緒に育った近親者同士は性的関心を失う傾向のあることを強く示唆している。ところが、この説（ウェスターマーク効果）は同時代に精神分析学を創始したフロイトによって黙殺されてしまう。ウェスターマークの説は、後の人類学者たちからもほとんど無視される結果となり、人間社会における近親者間の交尾回避傾向は長い間実証されず、論議の対象にもならなかった。

ウェスターマークの説を復活させたのは、中国における幼児婚とキブツで育った子どもたちの結婚に関する調査だった。中国でシンプアと呼ばれるこの幼児婚は、男女ともに幼児のうちに将来結婚する相手が決められ、娘が婿になる息子の家に引き取られて一緒に育てられる制度である。シンプアで結婚した者を含む14,200人の女性を調査したウォルフは、シンプアで一緒になった女性の出産率が有意に低く、離婚率が高いことを見いだした。もう一つの例はイスラエルのキブツで、ここでは家族という集団が解体され、子どもたちは親と離されて共同保育される。キブツで2,769組の結婚を調査したシェファーによれば、同じキブツの出身者同士の結婚はそのうちわずか13組だった。つまり、同じキブツで幼児の頃一緒に育った男女は、互いを適切な結婚相手と見なさなかったのである。

近年になって霊長類の野外研究が進むと、ウェスターマーク効果が人間以外の霊長類でも広く認められることがわかってきた。マカクやヒヒの仲間は母系的な集団をつくる種が多く、ふつうはメイト・アウトによって母と息子が交尾する機会は減じられている。しかし、たとえ雄が思春期以後に生まれ育った集団に残っていても、母と息子は交尾をしない。長年にわたって継続した調査が行われている京都府嵐山のニホンザル群では、母系的な血縁関係の三親等（叔母と甥の関係）以内の近親者間ではめったに交尾が起こらないことが判明した。ほとんどの種では母親を同じくする兄弟姉妹間には交尾が起こらないし、父系的な血縁でも父と娘（アヌビスヒビ、ゴリラ）、兄弟姉妹間（タマリ

ン、マーモセット)には交尾が起こりにくいという報告がある。

なぜ、こうした近親者間に交尾が起こらないのだろうか。この問いに対する答えとして最もよく挙げられているのは、「幼少期の密接な関係が交尾回避を引き起こす」という理由である。母系的な集団をつくる種では、母親を中心にして兄弟姉妹、祖母と孫、叔母と甥、イトコ同士などが結束する傾向が強く、他の家系のサルたちとけんかをするとよく助け合う。こういった親密な関係が母親と息子に見られるような交尾回避を生み出しているというわけである。

雄と子供の間にも同じようなことが起こる。雄が幼児を熱心に世話するような種では、雌の幼児が性成熟に達したとき、この雄と交尾をしないことがわかってきた。雄が積極的に乳児の世話をするタマリン、マーモセットでは、雄たちは自分が育てた雌の子どもたちとは交尾関係を結ばない。単雄複雌の構成をもつ非母系的な(雌が集団間を移籍する)集団で暮らすゴリラでも、雄が子どもと離乳期前後から親密になる傾向があり、この雄と思春期に達した娘ゴリラの間で交尾回避が起こる。母系や父系という集団の構造とは独立に、幼児期の親密な関係が性的関心を失わせるという傾向をどの種も持っていると考えられるのである。

血液からDNAを採取してその組成を比較するフィンガー・プリント法が開発され、父子判定が可能になってから雄の行動を血縁関係と照らし合わせて調査できるようになると、驚くべきことがわかってきた。京都大学霊長類研究所の囲いのある放飼場で暮らしているニホンザルの集団で父子判定を行った結果、母と息子、同母兄弟姉妹の間には子どもが生まれていないが、父と娘、異母兄弟姉妹間では生まれていることが判明した。また、ニホンザルに近縁なバーバリマカクを放飼場に放して観察した結果では、母系的血縁の四親等(イトコ)以内の組み合わせのうち、実際に交尾が見られたのは一割にも満たなかった。一方、父子判定を行って父系的血縁内での交尾交渉を調べてみると、四親等以内の五割をこえる組み合わせで交尾が見られ

た。ニホンザルでもバーバリマカクでも、父系的な血縁内では交尾は回避されていなかったのである。

ところが、血縁とは関係なく交尾回避が起こることも明らかになった。乳児の世話を積極的にするバーバリマカクの雄と子供の間にはふつう血縁関係がない。しかし、こういった雄と子どもの雌は、子どもが成長して交尾が可能になっても母系的血縁並にほとんど交尾が起こらなかったのである。すなわち、交尾回避に必要なのは実際の血縁関係ではなく、生後につくられる持続的な親和関係だということになる。

交尾回避がメイト・アウトを引き起こす条件

これまでの報告の中にも、交尾回避が結果としてメイト・アウトを引き起こしているのではないかという推測がある。しかし、多くの報告はむしろメイト・アウトは交尾回避とは無関係に起こると見なしており、さまざまな場所で長期にわたる研究が行われているニホンザルでも両者に強い相関は見られない。おそらく、交尾回避がメイト・アウトを引き起こすには特別な条件が必要だと思われるのである。

まず、集団サイズは小さい方がいい。なぜなら、近親者以外に交尾可能な異性がたくさんいれば、雄も雌も近親者との交尾回避によって交尾相手が不足する事態にはならないからである。ニホンザルやバーバリマカクの例から推測すると、四親等以内の母系的血縁者の他にあまり異性がいない位の集団サイズなら、交尾回避によってメイト・アウトが促進されると考えられる。

ニホンザルの例は、集団サイズの問題を考える上で好適かもしれない。野生のニホンザルはふつう50頭前後の群れで暮らしている。群れの遊動域は隣の群れの遊動域と一部重複しており、それぞれの群れはいくつかの隣接群と出会いを繰り返すことになる。屋久島に生息しているニホンザルはとくに群れサイズが小さく、20頭前後の群れが多い。四親等までの家系集団を想定すると、この群れサイズではせいぜい二つか三つの家系しか含むことができない。そのた

めか、屋久島ではすべての雄が思春期に至ると例外なく出自集団を離脱している。ところが、ニホンザルは餌づけされると急速に個体数を増加させて100頭以上の集団に膨れ上がる。こうして群れサイズの大きくなった集団では、思春期を過ぎて生まれた集団を出ていかない雄が見られる。大分県の高崎山、京都府の嵐山、長野県の地獄谷などの餌づけ群で、離脱せずに成熟した雄たちが優劣順位を上げて最高位に登りつめた例が知られている。これらの雄たちはたしかに母系的血縁関係のある雌たちとは交尾をしない。しかし、自分の家系以外にたくさんの雌が同じ集団で共存しているので、雄たちの性的活動が極度に抑制されることはない。

嵐山では、ちょっと変わった現象が報告されている。秋から冬にかけての交尾季に持続的な交尾関係をもった雌雄が、雌の発情が終わっても親密な関係を続けるようになる。雌にとって優劣順位の高い雄のそばにいられば、撒かれた餌を優先的に取ることができる。このため、雌はこの雄を継続して追従するようになるが、次に交尾季がめぐってくると雄への性的関心をしだいに示さなくなる。血縁関係はないものの、交尾を契機に結ばれた親密な関係が、やがて両者間に近親者間に見られるような交尾回避を引き起こすのである。こういった現象が生じるのも、群れサイズが大きく、交尾を回避する雌が新たに増えても雄の性的活動が抑制されないことがその一因になっていると考えられる。

次に条件として考えられるのは、子どもが思春期に達するまで親がその集団を離れないことである。ニホンザルのような母系社会では、雌は動かないが、雄はふつう短期間しか一つの群れに滞在しない。このような群れでは、思春期に達した雄と母系的血縁関係のある雌との間でしか交尾回避は発現しない。たとえ雄が幼児と親密な関係を結んでも、その幼児が性成熟に達する前に雄がいなくなってしまうので、交尾回避を示す機会がないのである。これに比べると、ペア型社会や、雌が集団間を移籍する非母系社会の方が両親と交尾回避を起こす機会が多いと言えるだろう。非母系社会では雄より雌の

方が集団を離脱しやすいが、出産後に雌の移籍が停止するために、娘も息子も思春期に達したとき両親が出自集団に残っている確率が高いからである。

もう一つの条件は、幼児と異性の年長者との間に持続的な親和関係が結ばれることである。せっかく雄も雌も子どもと長期に同居する条件が整っても、幼児との間に親密な関係が生じなければ交尾回避は生まれない。雌の場合は、出産に引き続く育児を通して幼児との親和関係は自然に形成されるが、雄はそのような機会が必然的にめぐってくるわけではない。

母系的な社会で暮らす霊長類は雄が比較的短期間しか一つの集団に滞在しないので、野生では幼児との親密な関係が交尾回避につながる機会は少ない。しかし、雄が集団間を移籍しないテナガザルやゴリラでは、雄と幼児の間の親密な関係が交尾回避に結びつく事例が野生で見られる。テナガザルはペア型、ゴリラは単雄複雌の構成をもつ集団で暮らすのが、いずれも雄が一度自分の集団をつくると、生涯その集団を離れないという特徴を持っている。雄は生まれたばかりの赤ん坊にはあまり興味を示さず、乳離れをする頃から子どもと密接な関係をもつようになる。抱いて運んだり、一緒に寝たり、外敵から保護するなどの育児行動は、子どもの成長とともに遊ぶ関係に変わっていくが、親密な関係は思春期まで持続する。そして、雌の子どもは思春期にこの雄との交尾回避によって、集団の外に交尾相手を求めて出ていくと考えられるのである。

ゴリラの社会における交尾回避とメイト・アウト

マウンテンゴリラでは、雄も雌も性成熟前に生まれ育った集団を離脱する。雌は離脱後すぐに単独生活をしているヒトリ雄か、別の集団へ移籍するが、雄は別の集団へ移籍することも元の集団へもどることもできない。離脱後しばらく単独で森を放浪し、やがて他集団から雌を誘い出してきて自分の集団をつくる。最初のうちは雌が出たり入ったりするが、そのうち出産すると雌は雄の元に定着するようになる。こうし

ていったん雌と子どもを得ると、雄は生涯その集団の核雄として居続けることになる。それは、ゴリラの社会では集団の外から別の雄が加入してきて核雄を追い出し、その集団を乗っ取るということが起こらないからである。ただ、核雄が老境に達すると息子達が性成熟後も集団に残るようになり、やがて核雄の死後はその集団を継承するようになる。こういった集団の編成様式は別の亜種ヒガシローランドゴリラでも基本的に同じである。

このような複数の雄が共存する複雄群では、雄ばかりでなく雌も生まれ育った集団を離脱しなくなることがわかってきた。それは、若い雄たちが集団に残ったおかげで、離脱前の雌たちが集団をはずしに交尾相手を見つけられるようになったからである。雌たちは幼児期に親密な関係を結んだ核雄（たいがいは父親と考えられる）や同母兄弟とは交尾を回避する傾向がある。しかし、異母兄弟とは交尾関係を結び、妊娠して出産することがある。ヴィルンガのマウンテンゴリラでもカフジのヒガシローランドゴリラでも、単雄群よりも複雄群の方が生まれ育った集団で出産する雌の割合が高いのである。つまり、ゴリラでは父系的な兄弟姉妹間には交尾回避が発現せず、その組み合わせで交尾関係が成立するとメイト・アウトが阻害されると考えられる。

ゴリラの社会で交尾回避が若い雌のメイト・アウトを引き起こす条件としては、以下のことが考えられる。まず前述したように、集団のサイズが小さく、出産後に雌の移籍が減少する必要がある。ゴリラの集団の平均サイズはどの地域でも10頭前後だし、雌は出産後に特定の雄のもとに定着する傾向がある。そして、外からの雄による集団の乗っ取りがない。これらの条件は、雄と幼児に親密な関係をつくらせ、それを思春期に至るまで持続させることに貢献している。

ゴリラが葉や樹皮など、いつでもどこでも手に入る食物を常食にしていることもメイト・アウトを促進する条件となる。食物の競争が低ければ、個体同士が近接して集団がまとまりやす

いので、雄と幼児が親和的な関係をつくる機会も増える。ゴリラはなわばりをもたず、隣接集団と大幅に遊動域を重複させている。そのため、さまざまな集団と頻繁に出会うので、雌は移籍する対象を選ぶことができる。これは、単独生活をしないゴリラの雌にとっては重要である。他の集団やヒトリ雄と出会ったときに移籍をするので、出会いが多い方が相手の情報を十分に得られるからである。

また、母系的血縁内の結束が希薄なことも、雌を移籍しやすくしている要因と思われる。ゴリラの母親は、ニホンザルのように子どものけんかに加勢して相手を駆逐しようとはしない。自分の子どもが劣勢のときは庇うが、あえて自分の子どもを勝たせようとしてけんかに介入することはないのである。けんかに介入するのは核雄が多く、この場合はほとんど常に体の小さい方、劣勢の方に加勢の手が差し伸べられる。つまり、核雄の介入はけんかの抑止に力が注がれていて、どちらかの勝敗をつけることではない。このため、ゴリラの雌は生まれた集団にとどまっても、他の集団へ移籍してもそれほど大きな差はない。どこでも自分の血縁者からは大きな援助は期待できないし、劣勢になればいつでも核雄からの加勢を得られるからである。

こういった生態学的条件や社会的条件がうまく組合わさった結果、若い雌が出自集団を離れて他の集団へ移籍することになる。そして、興味深いことにゴリラの集団ではインセストの回避が雌の離脱を動機づかせ、移籍を通じて雌の与え手（父親あるいは同母兄弟）ともらい手（移籍先の核雄）をつくりだしている。これは奇しくもレヴィ・ストロースの想定した結婚を介した女の交換によく似ている。ゴリラも人間も、インセストを回避する関係だからこそ近親の若い雌（女）を集団外へ出し、競合関係を高めずに他の集団へ移籍させることに成功しているからである。

回避から規範へ

霊長類社会に広く見られる「幼児期の親密な関係が後に交尾回避を引き起こす現象」は、あ

る条件下では若い個体の交尾相手の不足をもたらし、出自集団からの離脱を促す効果をもっている。そして、それはとくに非母系的な小さな集団で大きな影響力を発揮する。これはインセスト・タブーと外婚制とが強く結びついた人間の家族の原型を予感させる現象である。では、なぜそれが人間では規範になったのだろうか。

生まれつき血縁を認知する遺伝的な能力を備えていない霊長類は、生まれてからの社会的経験によって血縁を認知する。この認知は母系的血縁内では一致するが、父系的血縁内でははなはだあやしい。実際に血縁関係になくても幼児と親和的な関係をもちさえすれば、雄は雌と父親や兄弟のような交尾を回避する関係に成り得るからである。これは人間の家族において父親がいくらでも取り替え可能であることと一致している。

ゴリラにおける交尾回避とメイト・アウトが示唆しているのは、親子関係における親しさと性関係における親しさが違うものであり、同時に二者間に共存できないということである。そして、それが別物だからこそ親子は性的競合に陥ることなく共存できる。ゴリラの集団で父親と息子が共存できるのは、父親にとっては娘、息子にとっては母親というように互いに回避する異性がいるからである。回避する対象を互いの交尾相手として認め合うことで二世代の雄たちは共存できる。それは、成熟した雄同士がそれぞれ独占的な配偶関係を守りながら共存する「アダルトリーの禁止」へと発展する可能性を示唆している。親和的な関係をもつ雌雄だけでなく、交尾を回避する異性の対象を増やせば、それだけ雄（男）たちが性的競合を高めずに共存する機会が増すからである。

ただ、ゴリラの父親と息子の共存は異母兄弟姉妹間のインセストを必然的に結果し、若い雌の移籍を抑止する効果をもっている。もし、若い雌の移籍を恒常的に促進しようとすれば、交尾回避を起す範囲を規範として広げて、出自集団内で思春期に達した雌が交尾相手を見つけられないようにする必要がある。雌の移籍が双方の集団にとって利益につながれば、これは実

際に起こった可能性がある。

その利益とは、雌の交換によって二つの集団が敵対関係を解き、さまざまに協力できるようになることだったに違いない。チンパンジーやボノボでは食物を他者に与える分配行動が知られている。とくに、肉食をする際には獲物をもった個体のまわりに何頭もチンパンジーが群がり、執拗に分配を要求する。獲物の所有者はたいがい最優位の雄であり、自分の協力的な雄や雌にだけ肉を分ける傾向があるようだ。このように、類人猿は食物の分配を政治的な目的に用いることがあるが、肉と違って交尾相手は分配できない。そのため、交換という社会技法が必要になる。雌の交換によって雄と雄、集団と集団が相互媒介的に結ばれることこそ、家族という人間特有の集団単位を登場させる契機になったと思われるのである。

かつて今西が予想した人間家族成立の四条件のうち、「近隣関係」（隣り合う集団同士が緊密な協力関係を結んで上位の集団をつくること）は霊長類に見いだすことができなかった。ゴリラもチンパンジーも集団関係は敵対的で、とても二つの集団が融合したり協力関係を結ぶなどということは考えられない。霊長類で重層的な集団構造をもつのは、単雄複雌の集団がいくつも集まるマントヒヒやゲラダヒヒだけである。これらのヒヒは森林性の類人猿と異なり、樹木の少ない草原に生息し、捕食者を避けるために断崖絶壁にまとまって寝るといった共通点をもっている。おそらく、初期の人類も森林からしだいに草原へと活動の場を移していくにしたがい、複数の小集団がまとまって活動する利益が大きくなったに違いない。その連合を実現させるために、初期の人類は類人猿から受け継がれた交尾回避とメイト・アウトの連携を約束事として拡大強化したのだろう。それは双方の集団に配偶者の交換を通じて性的競合の自制や抑制を要求し、それを担保として血縁関係に匹敵する親和的な関係をもたらすことになった。

人間家族は父性という仮構としての親性を創り出すことによって成立したと私は考えている。それは、雄が雌と同じように親子としての

親和的な関係を子どもと結ぶことによって可能になり、性的な親和性とは異質な関係を周囲につくることによって形を成す。インセストの回避は、そういった仮の親子関係をつくった副産物として父親と娘の間に必然的に生じたと考えられるが、おそらく初期の人類はそれを逆に規範として利用したのだろう。インセストの回避を規範にすることによって、異性との複合的な関係（例えば、自分の娘で他人の妻というような関係）が生まれ、他者や他集団との共存が可

能になるからである。こうした意味でインセスト・タブーは、インセストを防止する機能だけに限定された規範ではない。それは、同性間、異性間に多元的な関係を創りだし、異性の交換を通じて同性同士、集団同士を結びつける文化的な装置である。まさに「自然から文化への移行を示す規範」であり、初期の人類が複数の家族からなる重層的な社会をつくるための不可欠な第一歩だったと言えるだろう。



人類進化のキーワード

- 思考する者
- 道具と武器をつくる者
- 言葉とシンボルを使う者
- 狩りをする者
- 採集する者

食物を共有する者

図1 分子生物学によるヒトと類人猿の系統樹

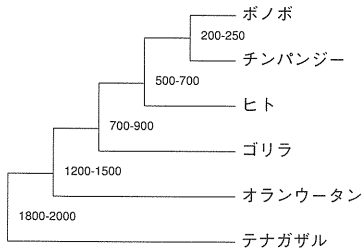


図2 人類固有の特徴の出現時期

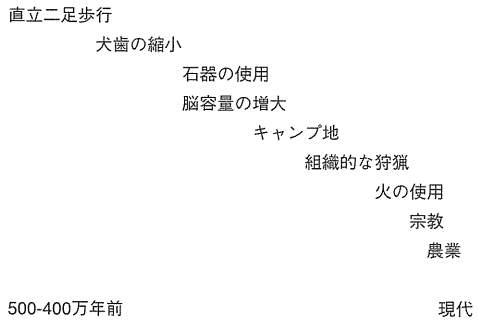


図3 人類進化のストーリー

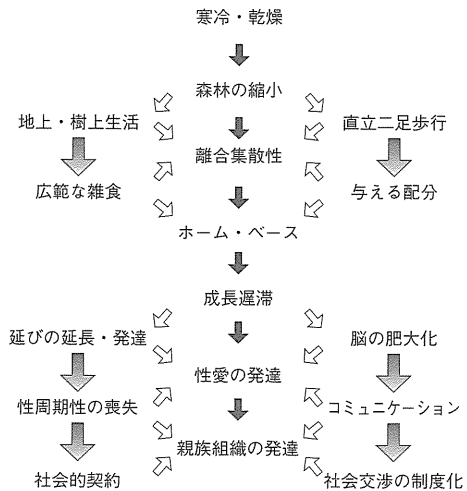


図4 ゴリラの集団の成長モデル

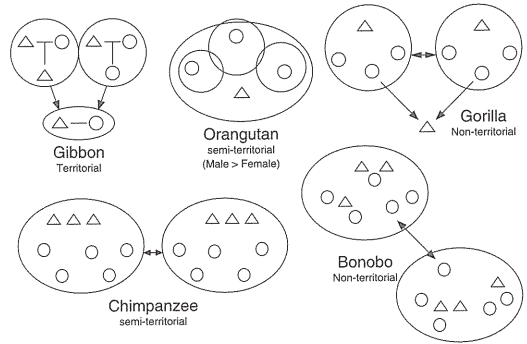
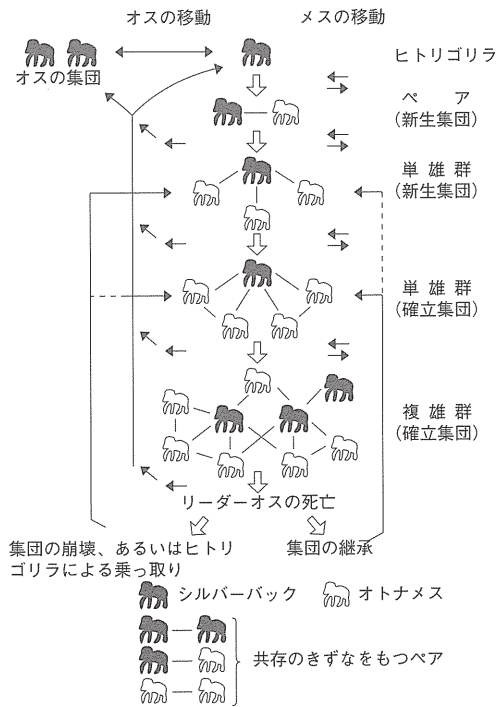


図5 人類の父親の成立過程

- 長期配偶関係 (女と幼児からの二重の選択)
- 幼児との提携関係の維持 (世代)
- 母子関係の模倣 (後尾回数)
- 与える分配 (性的分業)
- 遊び (抑制と同調) の拡大 (同性関係)
- 男の性的関心と女の受容性の拡大 (性の契約)

図6 インセストの回避につながる霊長類の行動傾向

Mate out

どちらか、あるいは双方の性が成熟する前に集団を離れ、複数回移籍を繰り返す。

Mating avoidance

血縁度の高い異性 (母一息子、父一娘、兄弟姉妹) は交尾を避ける傾向がある。

図7 類人猿の性と繁殖に関わる特徴

	テナガザル	オランウータン	ゴリラ	ヒト	チンパンジー	ボノボ
体重の性比	1.1	2.0	1.6	1.2	1.3	1.2
睾丸と体重の比		0.05	0.02	0.06	0.27	
性皮の腫脹	なし	なし	わずか	なし	あり	あり
発情の季節性	なし	なし	なし	なし	なし	なし
月経周期	28日	29日-30日	32日	28日	35日	35-40日
交尾日数	1-2日	2-3日*	1-3日	不定	7-17日	5-40日
交尾タイプ	SBI	SPI	SBI	SPI, SBI	SBI	SBI
交尾時間	1分	14分	1.6分	2分	8秒	15秒
交尾の誘い	オス<メス	オス>メス	オス<メス	男>女	オス>メス	オス>メス
交尾関係	長期配偶関係	短期配偶関係	長期配偶関係	長期配偶関係	乱交 短期配偶関係 独占排他的	乱交
妊娠期間	189-239日	264日	258日	270日	228日	240日
出産間隔	36月	96月	48月	10-48月	60月	54月
性的休止期	36月	96月	40月	0-36月	53月	12月